

## ソビエト・チエコにおける日本文学

著者	近藤 忠義, 西尾 実, 小田切 秀雄
雑誌名	日本文学誌要
巻	3
ページ	2-16
発行年	1959-08-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00018972">http://hdl.handle.net/10114/00018972</a>

# ソビエト・チェコ における日本文学



鼎談 近藤 忠義  
西尾 実  
小田切 秀雄

カッツはモスクワアルバートスカヤ広場のゴッリ銅像

**小田切** 約七十日ほど近藤先生がソビエトへいらして、モスクワやレーニングラードやチェコで講義をなさったり、いろいろ見ておいでになったわけです。そこで、ソビエトでの日本文学研究がどうなっているかということが今日の座談会の趣旨なんです。それが、それだけでなく、どんなふうに出でになったか、それから向うでどんなことを見てこられたかというようなことをあわせて、いろいろお話したいと思います。お出でになってからお帰りになるまでの大体の経過をまず一つ……。

**近藤** 事務的にね。出発がたいへん遅れました、なかなかいつ発てるかわからなかったのですが、ちょうど「タガンローグ」という船が日本へきたので、それがナホトカへ帰るときに便乗しようということ、

四月三日に東京を発って名古屋へ行ったのです。それは名古屋が「タガンローグ」の日本における最後の寄港地だったからです。ところが名古屋へ着いた日の昼まえから突風が起りまして、四日の出航が五日にのびました。海は大分荒れていましたから、私は酔うといけないと思って、睡眠薬を飲んで寝てしまったのですが、翌朝目が覚めたらどうもようすが違うのです。私は瀬戸内海のあたりにいると思っていたんですが、船長のベフテレフさんがきて、嵐で進路を変えました、船は津軽海峽に向って北上しています、というわけで、五日の夕方に名古屋を発ってマル三日乗りましたから、八日の夕方にナホトカに着いたのです。その晚十一時ころ寝台車でナホトカを立って翌朝オジョールヌイエ・クルチ

という駅に着き、バスで三キロ離れたウラジオストックの空港に行きまして、そこから例のソ連御自慢のTY一〇四というジェット機に乗って十四時間、詳しく言うと、イルクーツクで二時間、オムスクで一時間、それぞれ給油時間があったから正味十一時間でモスクワに着きました。シベリア鉄道だったから十日ぐらいかかるのですが……。

モスクワ空港に着いたのは現地時間の午後六時半でまだ明るいのです。東京の桜は今年は数日早くて市内は満開でしたけれど、ここはまだまだ全くの真冬で、青いものが一つもない。いちめん褐色の林や土手に雪が鹿の子まだらに残っている。とにかく蕭条たるものでした。私は「ウクライナ」というホテルに入りましたが、翌日窓から見おろしたら、モスクワ河にものごい流水があるのです。ところがその氷が次の日にはびたりと無くなりました。そうすると、今度は急速に青くなってくるのですね。それはえらいスピードです。草木が一日一日目に見えて青ばんでゆき、非常にいきおいで春になってくるんです。

#### 西尾

いいときに行っただすね。

#### 近藤

そして花が一ぺんに咲き始めるの

です。そこでしばらく休ませてもらって、講義を始めたのは四月十三日からでした。一週間二回、午後だけということ、もったいないと思いましたが、せっかく組んでくれたのでやってみたのですが、やってみるとやはり時間がたりないのですね。戦前の資料は入っているだろうけど、戦後の日本文学の研究というものは日本では非常に進みましたから、この実情は伝わってはいないだろう、しかも、この実態は単に知識として紹介してもダメなんで、これはやはり平和のための、あるいは日本民族の独立のための、国民の戦いとしっかり結びつくことで発展したのだし、また現に発展しつつあるわけですから、このところを十分理解してもらうことが必要だと思っていたわけです。そうしたらはたして戦前の資料はある程度あるけれども、戦後の資料がほとんどないし、あっても偶然的なんですね。だれかが持っていた本がたまたまあるという形なので、非常に心配したのです。これはソビエトにおける日本文学研究の重大な「危機」という言葉で私は頭の中で考えたほどです。ここで何とかしなければならぬと考えまして、非常に時間がほしか

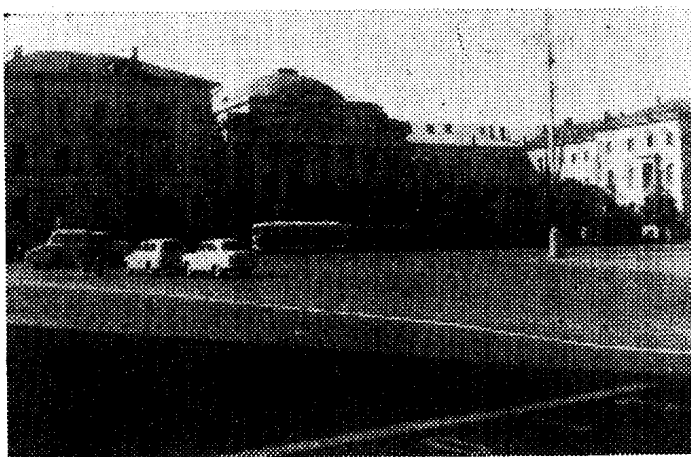
ったわけです。しかしゆっくり組んでくれているから、それ以上時間割りを増してもらうことも気の毒だと思って、与えられた時間の中でできるだけ話をして、あとでホテルなんかへもきてもらったり、先生方とホテルで研究会をしたりして補うようにしました。が、一カ月といっても一週間に二日、一日が二回、合計十八回やったわけです。それでもまだまだ言いたいことがあるし、不十分だったので、夏休みにひまになったら言い残したことやなんかをプリントして送りましょうということ約束したのです。それからもう一つは基本図書の体系的なリストを一つ作ってお送りしようという約束をして帰ったのです。

それからレーニングラードは、……最初東京のソビエト大使館でもレーニングラードへ行ってほしいと言っていたので、当然行くものと思っていたら、学年末の試験が近づいてきて、レーニングラードはゆっくり行けなくなりました。しかも最初通訳を通してこういう案が出てきたのです。それは、メーデーの晩モスクワを発って、モスクワの講義が五月四日にまたあるわけだから、四日の朝モスクワに帰るという計画

で見物に行っていらい、という案なので、ぼくは講義の時間がほしくて堪まらない矢先きでしたから大いに腹を立てました。〃ぼくは見物にきたものではありませんよ〃と。あせっていましたからね。ぼくは絶対にレーニングラードへ「見物に行く」ことはいやだ、拒否します、と言ってね。そしてそんなことならモスクワの講義が十一日に終わるからすぐ日本に帰ります。見物などしている気持はありません。今すぐこのことを関係者に電話で伝えてくださいと言って大いに怒ったのです。こう言うとか何だか突然発作的に怒ったように聞えるけど、通訳が気がきかなくて、私の意思がなかなか伝わらないこともあってね。そのうちに〃モスクワ大学の講義が終ってからレーニングラードへあしかけ五日間出かけて行って講義をしてください〃という案が示されましたので、それなら喜んで行きましようということ、モスクワ大学での責任をはたしてから、五月十一日にレーニングラードへ立ちました。ところが試験前ですからゆっくりできないのです。だから中三日時間割りを組んでくれたのですが、三日では大したことじゃべれないので、非常

手段をとりました。「私があなた方とふたたびこうしてお目にかかる機会は今後おそらくは無かろうと思います。非常にだいたいなときだから私は昼飯を抜いてしゃべりたい。だからあなた方も昼飯を抜いて聞いてほしい」ということにしました。ビックリしたと思うけど……(笑)しかし、ぼくもさすがに疲れましたよ。

最後の日には講義をすませたあと、どうしてもエルミタージュ美術館だけは見て帰りたいと思っていたものだから、大学からあらかじめ電話で頼んでもらって、二時間半で見廻るといいう大変残念な見方をしたのですが、これにはすっかり疲れしました。そしてその晩すぐモスクワへ夜行で帰ることになって、翌朝モスクワに着いて大学に帰って見たら、きょうの午後三時半にジェット機でチェコへ飛んでくれということです。席がとってあるので延ばすわけにいかないし、疲れていたので、しょうがないからジェット機で飛んだ。これはTY一〇四Aといういい飛行機で、汽車だと四日もかかるそうですが二時間半でプラーグへ着いちゃうのです。そして飛行機の中で



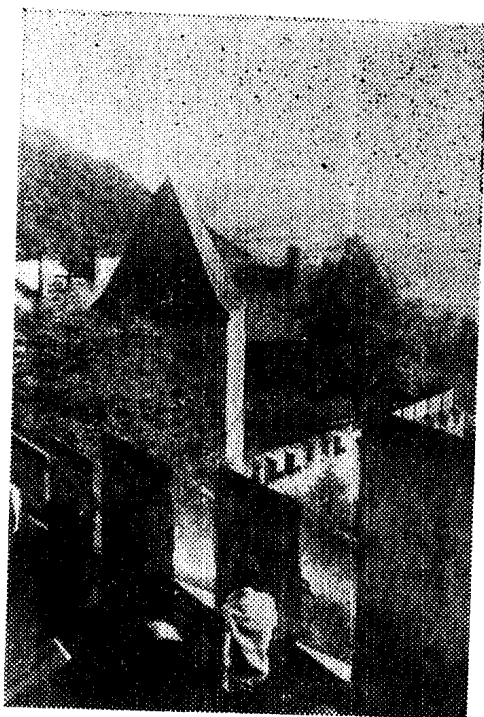
モスクワ大学 有名なレーニン丘の新校舎ではなく  
旧市内の文学部のある建物

グッスリ寝たし、料理もコーヒーもぼくの口にあうので一ぺんに元気を回復しました。

プラーグはチェコスロバキヤの教育文化省の招待で二週間という話でした。ヴィザはレーニングラードへ行ってるあいだにモスクワでとっておいてくれたのですが、行ってみると実にいいところで、非常に気に入りました。だいたいモスクワは食事の量がぼくには多すぎるのです。これには閉口

しましたね。そして残したらまずいから残したとは思ってくれないのでね。プラグはこじんまりした料理で、私の口にも合うのでこれがまず気に入りました。それからコーヒーがモスクワよりちよつとうまいです。モスクワのコーヒーはまずいですね。

モスクワもレーニングラードもそれぞれ独特の美しさを持っていますが、プラグには明るくて軽快な、可憐な美しさがあるんですね。飛行機が着陸するために旋回しているときに下を見たら家々の赤い傾斜の



プラハ郊外チャールス大帝別荘

急な瓦屋根に短い四角なエントツがのっかっていて、……赤といってもけばけばしい原色の赤なぞではない、明るくて落ちついた色ですが、ちょうど童話のさし絵に出てくるような色と形なのです。青葉に包まれたそういう街々を縫ってヴルタヴァ河が流れている。飛行機の上からつくづく見惚れていましたが降りて見たらほんとにきれいなんですよ。街路燈から屑箱から舗装道路から、壁に貼ってあるポスターから、何から何までみんなかわいらしい。たとえば屑箱——これはモスクワにもたくさんあって

非常に感心したんだが、モスクワのは鉛色に塗られた金属製の天目型の大きなもので、歩道などには何十歩に一つといった具合に並んでいます。タバコの吸いがらや紙屑はみんなそこへ捨てるから道路は非常にきれいなんです。——日本だったら一晩のうちに消えて無くなるから、残念ながら真似はできませんね。——ところでモスクワの屑入れは非常にブッキラボーなんです、プラグのは、赤と黄と白とでダンダラに染め分けて

あって童話ふうな装飾的なんです。街路燈にしても、プラグのは非常に美しい。赤と黄が多くて、「プラグ色」とぼくは勝手に名付けたのですが、赤といっても少し朱に近いような色で、そういう赤と黄で塗られた街路燈の柱などは、先き細りになっていて先端がわらび型にちよいと曲げてあったり、……どんな些細なところにも何か工夫があるんですね。ショウウィンドを見ても、西ヨーロッパに近いだけあって、モスクワみたいにブッキラボーではやっていけない、資本主義国に対抗する意味もあって、非常にアカぬけています。しかも私にとっては、モスクワ、レーニングラードでの責任を一応はたしたあとですから、気持ちが楽になっているということもあって、非常に楽しかったです。それでヴィザを更に一週間延してもらって、結局三週間プラグにいたわけです。

**西尾** 日本文学研究のプロフェッサーにはどんな人にお会いになりました？

**近藤** モスクワ、レーニングラード、プラハの大学の先生には全部会いました。それから大学の先生ではないけどアカデミー附属の研究所の所員や日本文学の翻訳者なん

かで大学と密接な関係を持っている人たちもモスクワではたくさん来てくれましたから、その人たちとも話合うことができて仕合せでした。

**西尾** ずいぶん大勢いるそうですね。

**近藤** アカデミー附属の研究所員を入れたらたいへんな数でしょうね。

**西尾** それは大学とは関係ないのですか。

**近藤** それは日本流に考えたら全く関係ないわけなんです、むしろは実質的には非常に関係がありますね。アカデミー附属研究所の所員と大学の教授学生との接触は緊密だし、又たとえばプラグでいえば大学の図書館の本とプラグのアカデミー所属の東洋研究所の本は学生は同じように自由に見られるというようなわけです。そこが日本と大変違いますね。

**西尾** 日本へきた方で、国語研究所の關係でよく名前を知っている方をいうと、ヴァルドリさんは文学もやっているのですか日本語だけですか。

**近藤** 日本語研究が専門ですが最近西鶴にも興味があるそうで、いっしょに研究会もやりました。

**西尾** あの人はどこででしょうか。アカデミー所員ですか。

**近藤** 東洋研究所の所員です。

**西尾** それからフェルドマンという人は？

**近藤** フェルドマンさんにはお目にかかれませんでした。あなたからのお手紙はやはり研究所にいるマロシキーナさんに頼んで渡してもらいましたけれども。来年の夏には東洋学の国際学会がモスクワだったかレーニングラードだったかで開かれるので、日本からもぜひ言語学者を招きたいと言っていました。近いうちに招待状を各国に送るが日本の国語研究所にも出すと言っていました。

**小田切** その話にいく前に、プラグでは通訳の女性が非常に美しかったので、それで、チエコが気にいってしまわれたらしいという伝説がつたわっていたのですが、その話が出ないのでお伺いしておきたいのですがね。

**近藤** これは冗談でなくて言うのだけど、大変にきれいです。だいたい文学をやっている人には圧倒的に女性が多いのです。プラグ大学でいえば……モスクワの

日本文学は六カ年ですが、プラグは五カ年なんです……今四年度生、五年度生はないのです。というのは、調節しているからなんです。だいたい日本語・日本文学だけ専門にやったのは今のところ需要がないので、日本語科の学生は英語を合せて勉強させられていますね。しかもその英語というのが大した英語で、古典英語までやられています。英語と日本語をやっていれば百パーセント就職があるそうです。ただ日本語だけではちょっと就職困難ということですが、そういう関係でときどき調節するそうですが、今年は四年、五年がいなくて、来年は一年生は募集しないそうです。ですから私が行ったときは一、二、三年生だけがいて、一年二名、二年二名、三年三名、全部で七名。そのうち女が六名、男が一人です。

ですから通訳はどうしても女性になるわけで、どういう伝説があったか知らんけれども、ついてくれた女性はいへん清潔な美しい人たちで、たいへん感じがよかったです。

**西尾** それから日本へきた人で、あの人は何とかいう人でした……

**近藤** ヒルスカーさんでしょう。あの先生にはしじゅうお目にかかりました。あの方は御主人が建築関係のアカデミー会員で、両方とも研究生活をしています。漱石の「夢十夜」を数年前に翻訳して出版されましたし、去年は「草枕」を出していますね。それから広く日本文化の紹介という意味で、大きな本もずいぶん前に出ていますね。

**小田切** チェコの話から始めていただくことにして、チェコでは日本語および日本文学関係というのはどの程度研究が進められていますか。

**近藤** これはチェコもソ連も同じだと思いますが、弱点といえば、資料が十分に、そして体系的に揃っていないということ——それには、日本とチェコとは国交が回復しているにしても、いろいろ資料交換に不便な条件があるということと無関係ではないと思うけれども、資料に制約されているから、体系的な一つの展望を持って、その上に立って一人の作家、一つの作品をやるということができないのです。これは学生についても先生についても言えることだと思いますけれども、ですから極端にい

えば、偶然自分の手許に、あるいは自分の身边に材料があった部面について研究を始めるということですね。そしてその研究がすむと、それを広げるためにはまた資料がたりないわけですから、またあまり関係がないような次のテーマにとりつくということが学生の場合には顕著にありますね。これは早急に克服しなければならぬことで、このことはチェコでも言ったのだけれども、モスクワでは公式に総長さんにそのことを伝えました。

つまり、ソ連における日本研究の今の段階には二つの点で欠陥がある。その一つは、今言った資料の不足からくる、研究の偶然性というか恣意性というか、無体系的なみたいなものです。これは各学生についても言えるが、大学の日本文学科そのものにもあるんじゃないか。しかしこれは絶望的なことではないので、すぐにソ連の場合は克服できるだろうし、克服しなければならぬ。そのためには資料の交換について、あるいは資料の寄贈についてみなさんと十分協力する必要があるだろうということと、それからもう一つは、そういう弱点を急に克服するためには二つの方法をとら

なければならぬ。一つは教授を……私が第一回だったわけだけど……あとどんどん交換すること。しかしその交換について私はこういう注文があると言ったのです。

つまり、私は非常にぜいたくな生活をさ

ブラハの街中で





モスクワの本屋さん

せてもらっている。たとえば一流の国際ホテルに泊めてもらうとか、いつでも自動車が見にいく場合、遅くなつてはねても自動車が劇場の前で待っている。そんなことはムダなことだ。ことに、これは何も望ましいことではないけれども、日本のまじめな学者は貧しくて、切りつめた生活に馴れているから、そういう贅沢な待遇をする必要

はない。大事なことは、もっと長く、学生の寮に宿泊してでもいいから、一流ホテルの費用は浮かせて……もっともむこうは大国だからそんな費用は何でもないかもしれないけれども、長く泊めて、講義や話合いを十分にさせるということが今の段階では非常にだいじなんだ。しかし日本の国会議員を招くときはどうか知りませんが、言ったら笑っていました……、学者にはそういう大名旅行をさせることはすでに時代遅れだと確信します、と言ったら、非常に真剣に聞いてくれました。私のあとから行く人はたいへん迷惑するかもしれないけれども……（笑）

もう一つは学生交換です。これは日本政府がその気になるのを待っている間に合わないし、文化協定が結ばれるのを待っているにもきりがないので、それより前に簡単にできることからやったらどうか。それには大学同士の約束がいいだろう。たとえばモスクワ大学と法政大学と。そういうことはぜひやってほしいし、ことに法政大学では私の旅行中に総長がかわったわけだけども、大内前総長は一人や二人の学生なら引受けてもいいということを私に個人的に

言われたし、発表してもかまいませんと言っておられたのです。有沢新総長も前総長と意見は同じだろうと思うので、たとえば法政大学とモスクワ大学という二つの大学で協定を結んだらどうかということを言いましたら、それは非常に賛成してくれました。この問題は私が日本へ帰ったら日本でもだいぶ進んでいたようですね。あした東京の私立大学の学長たちがフェドレンコ大使と会うそうです。その問題でフェドレンコ大使が招待しているらしいので、その席に私にも出るという通知があったので、そのことを力説してきたいと思っています。もし法政大学が一人のソ連の学生を受け入れる、そのかわり、法政大学にはロシア文学やソビエト文学の学科はないわけだが、ソ連の経済地理をやっている人も、ソ連史をやりたいという人も、ソ連の法律をやりたいという人もいるのですから、さしあたり一人だけでもいいから、まず交換をするということが非常に大事だし、日本文学の立場から言えば、どうしてもソ連の学生を招いて日本の学生生活のなかで学んでもらうことが、今では絶対に必要だと思うので、そのことをあしたよく話してくるつも



りです。

**小田切** それはいいことですね。

**近藤** だから教授の交換と留学生の交換が、数は少くても、早急に始められて来れば、今言った日本文学研究の弱点のようなものは急速に克服されるわけです。またそうしなければいけないでしょうね。……しかし、そんなことと連関して、法政大学の日本文学科には改めて自信を持ちましたね。学生数がふえてナマケ者が圧倒的に多くなった点は処置なしだけど、まじめにやっている学生と教師との密接な学問的なつながり、それから法政的なゼミ形式……これはこむうにはないわけです、日本文学科には。

**小田切** ほかの科では？

**近藤** ほかの科のことはわからなかったです。日本文学の場合、学生はめいめい孤立しているですね。ただ自分の指導をする教授との関係だけで、孤立してやっているようですから、研究の積み重ねができていくでしょう。これは非常に損だとも思います。その意味で法政大学は、少くとも日文科についていえば、大した大学だと思いましたがね。そして教授間の学問的連携が非常

に強いし、日文科自身が一つの学問的な体系を持っているでしょう。その体系がいいか悪いかという問題とは別に、とにかく一つの体系を持っているということ、これは学生のために非常にいいと思うんです。

**小田切** あそこでは日本文学と日本語というのがくっついていっているのでしょうか。両方の学生を集めるとどのくらいですか。

**近藤** 各学年数は忘れましたが、平均して一学年三名ぐらいでしょう。それは日本語と日本文学を兼ねていますね。語学だけとか文学だけとかは成り立たぬわけです。

**小田切** そうすると、それに比べてチェ

コのほうが少いのはよくわかりました、チェコで日本文学を研究する理由は、一般に国際的な交流があるという面が必要でありその一つとして日本文学の研究は大きい意味を持っているというのでしょうか、特に何か日本文学について特別な関心があるかどうか、あるとすればそれは何でしょうか。

**近藤** それは、学生たちになぜ日本文学をやるのかと聞いてみたら、例外なく偶然ですね。

これには説明がいりますが、偶然と言っても日本文学が好きになったキッカケが偶然なんで、とにかく好きになったからやる、また、好きになったことがやれる条件を与えられている、というわけです。羨しいことですね。われわれのところのように、法学部を落っこったから仕方なしに文学部へはいる、なぞいうのはありません。好きだからやる、そういう学生をぼくらはもっと欲しいですね。ヒルスカ先生が訳された日本文学これはさっき言った漱石が二つあるし、和歌集がありますね。その和歌集の名前が非常におもしろい。「水の上



レニングラード革命広場 背景は冬宮

に書いた詩」というのです。これはれいの古今集の「水の上に数書くよりもはかなきは……」からとったのですが、この本が非常に読まれて版を重ねているそうです。そういう日本文学のよい訳を読んでまず日本文学が好きになったというのです。

**小田切** ヒルスカーさんは小林多喜二のものを訳しているんじゃないですか。

**近藤** どうでしたか。二葉亭の訳はありましたね。

**西尾** たしか野間さんのものをやっているというふうに聞きましたね。

**小田切** 日本のプロレタリア文学についての関心というものはどうですか。

**近藤** それはこういうことになるでしょうね。ちよつとむずかしい問題だけど、つまり今の話と連関して、かれらが日本文学を研究しはじめる動機はそういうふうにか文学作品の翻訳——ことにヒルスカーさんのチェコ語の翻訳はたいへん美しい良い訳だそうですが、それに文学的に感動して日本文学に入ってくる。その次にどういうふうに進んでゆくかというところ、ここが非常にぼくらと違うのですが、ぼくらはせっぱつまった、深刻な気持でしょう。つまり日

本文学を研究するというそのことが、今の段階では、ぼくらには日本国民としての闘いになっている。もちろんわれわれも好きだからやるのだが、単に机の上の趣味ではないのですね。ところが、むこうではおもしろいからやるのですね。感動したから好きになってやるのですね。これがチェコの民族の独立にどう関係があるかなぞということとは、一応無関係に、ほんとに楽しんでやることができる。

だから、プロレタリア文学も読んでいる学生はいますが、卒業論文の題目としては、チェコの場合少いですね。たとえば芥川とか志賀とか漱石とか、あるいは土佐日記とか古今集とか、そういうものが多いわけです。ですからプロレタリア文学作品をぼくらが今読む読み方とチェコの学生の読み方とは——ここが大事な点ですが、うまく言えないのが残念だけれど、とにかくちよつと違うわけですね。これはモスクワの場合も同じだと思います。つまり、一時日本ではそれに対して批判的だったものの日本文学のロシア語訳の場合の選択に偏りがあるという問題。しかし、大学の中に入ってみると、学生や先生方がそういう意味で

モスクワの掲示場 左上に岡田嘉子演出「女の一生」のポスターがみえる



偏って勉強しているという点は少しもありません。ただ帰りがけに、これから編さんされようとしている世界文学の百科辞典の項目案の日本の部を見せてもらったのですが、これはまだ原案の原案みたいなもので、今後何回も討議を重ねた上で決定され

るものですが、やはりまだ江馬修とか藤森成吉とか中西伊之助とかというような作家にウエートがかかっているんですね。そういう人には八百語乃至一千語わりあてられてました。源氏物語が千二百語、紫式部二百語。平家物語八百語。万葉集八百語。短歌千二百語。日本文学という大項目が一つあって、これが三万五千語。全項目数六十五、という組立ての中ではとにかく大きくウエートがかかっているわけです。むこうの研究は今の段階ではこういう過程を踏み越えながら進んでいるのですが、ひとりの日本人として見た場合にはやはり偏っていると思いましたね。

そのことはもちろん公式の席ではなかったが、周囲の人びとには、これからはこれではいけないし、また当然訂正されてゆくだろうということを話し合いました。

ちょうど中野重治さんがきていたでしょう。あの作家大会のころにはぼくはプラハに滞在していたのですが最後にモスクワに戻って、中野さんが東洋研究所で講演しているときに会いに行つて傍聴したのだけでも、婉曲にはあったがこういうことを話していました。たとえば思想的には非常

に進んでいる共産主義的な作家の作品が、思想的には遅れている無政府主義的な作家の作品よりも、……これはたいへんむずかしいことだけれども……大まかに言えば文学的にはすぐれているとはいにくい場合もありうる、という具合に、ソ連での現代の日本文学の翻訳の一つの偏りみたいなものに警告を発しているのだなと思われる、それはたいへんいい話でした。しかし、これはやはり当然変わってくるだろうと思ひますね。

**西尾** チェコではノバークさんとは……？

**近藤** ちょうどすれ違いになって、会えなくてたいへん残念でした。

**小田切** ノバークさんというのは？

**西尾** 日本語の研究で日本にずいぶん長くおられて、国語研究所にもたびたびおられてね。日本語とか日本歴史とか、ずいぶん広く資料を集めておられたです。

**近藤** 私もたいへん会いたくて、むこうで様子を聞いたたら、ちょうど一日ぐらい会える計算だったのです。ノバークさんがチェコへ帰ってきて、その翌日に私がチェコを発つ計算だったので、楽しみにしていたら、プラーグへこられないで奥さんのお里

とかに行かれて会えませんでした。

**西尾** あの大学は何という大学ですか。

**近藤** チャールス大学……チャールス四世の名前をとっているんです。

**西尾** その日本文学科というのがあるのでしょうか。日本語科ですか？

**近藤** 日本語科というのですが、しかし日本文学もやっているのです。ヒルスカールさんが主任です。

**小田切** 一九二〇年代から三〇年代にかけて国際革命作家同盟を中心に世界的にプロレタリア文学運動が發展した。そしてそのときには日本はソビエトおよびドイツに続いて第三位……場合によるとドイツのプロレタリア文学よりもっと実力を認められて、第二位というぐらいのところまでいったことがあるのですね。そういう面からも日本のプロレタリア文学への関心というものにはモスクワでもプラーグでもあっているのではないかと思うのですが。

**近藤** ぼくの場合は、もっと立入って文学的な交わりをすればわかったかもしれないが、その点は少くとも教室では感じませんでした。

**小田切** この面の研究は非常に遅れてお



りまして、当時の資料もあまり残っていないし、各国でもその研究はどの程度進んでいるのか、これは世界の文学者の共同研究のテーマなんで、どういうふうになっているか前から気をつけていながら、どうもその研究はあまり発展したようすが見られない

いで、残念に思っていたのですが。

**近藤** しかしこれから若い学者の交流がさかんになるだろうから、その意味でむこうへ行かれる必要がたいへんあるように思いましたね。

**西尾** 日本文学研究は本を読んでいればお分りでしょうが、文学に関する学問的な研究と評論というもののとの関係が一つになっているのか、それとも別々なのか……。

**近藤** 日本だけじゃないでしょうか、評論家と研究者の区別がされているのは。たとえば小田切君は新聞に何か書けば、最後には文芸評論家と出てくるわけですね。ぼくなんか書けば国文学者と出てくるのですね。もっとも小田切君とぼくなんかは違うかもしれないけど……。あれはむしろではありませんね。日本の文壇における評論家みたいなものは存在しないです。

**西尾** 学者ですか。

**近藤** 学者ですね。

**小田切** 日本には文芸時評というのがあり、文芸時事を扱う雑誌があって、それになんかウエイトをかけて、批評家が日常的に仕事をやっている。それと研究者の仕事との間にやや仕事の性質の違いがあるか

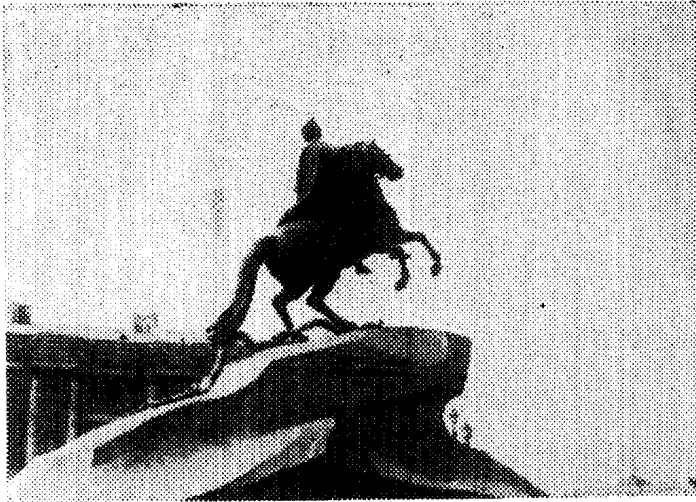
ら、日本の場合には批評家と研究者が二つに分れるという、これはある程度やむを得ない点があるのですが……。戦後は批評家と研究者とがだいぶくっついてきましたからね。

**西尾** だいぶくっついてきたように見えるが、たとえば批評家のほうでは国文学の研究というものを批評の準備とかということでは認めるかもしれないが、なにか国文学者というものを文学にたずさわるものとしては認めないかたむきがあるのじゃないか。

**近藤** それはやむを得なかったわけですね。つまり国文学の仕事は従来は狭い意味での文献学一点ばりでしたから、そう思われたことはやむを得ないと思うけれども、戦後は違ってきているのです。いわゆる評論家は国文学あるいは国文学者に対して、ほとんど迷信のような固定観念を持っていますね。

**小田切** その問題にはいろいろなことがひっかかっていますね。たとえば日本の古典の評価についても、たまたま小説家や評論家のだれかが言ったことを、そのまま評価のよりどころにして研究者がもっともら

しくあとづけてみたり……。それはだいたい減りましたけれども、まだなくなっていない。一方研究者のほうからいうと、批評家というものは結局感受性一本で、そのカンが当るかはずれるか、実際上の確実な根拠というものははっきりしていないじゃないかという感じもあるでしょうし、まだまだこれから日本でも打開していかなければなら



ピョートル一世いわゆる青銅の騎士像

らない問題はたくさんあると思うんです。ヨーロッパではその区別があまりないようですね。

**近藤** ヨーロッパの資本主義国でもおそらくそうでしょうね。

**西尾** それはイギリスやフランスはそうでしょう。ドイツの文芸学は戦前日本へきだが、あれとソビエトの文学論みたいなものとはどんな関係にあるのかな。

**小田切** あれは私の観測で申しますと、すぐに両方を統一するということこっけいな話になりますが、それぞれが文学のある面を握っている。その両方の握っている面の中で生かせる面を生かす。そしてより科学的な文芸学にしていく必要があるということを考えているのですが。しかしどうも遠くから見ている限りではなかなかその辺の関係がソビエトでもドイツでもうまくいっていないようです。そして文芸学自体についていうと、だいたい第二次大戦に入るところからあと、あまり発展はなくなっているのじゃないですかね。どうでしょうか。

**近藤** ぼくもそんな気がしますね。自信を持っては言えないけれども。

**小田切** たとえばモスクワで日本文学研

究者たちの研究の方法なりスタイルなり体系なりを御覧になって、学問上の基礎はむしろあるにしても、文芸学の活気ある発展と結びついて具体的な研究が行なわれるというふうには……？

**近藤** それはいいっていないような気がしましたね。少くとも卒業論文なんかを書いている学生についていえば、それは言えないように思います。それは革命後蓄積された文学研究の方法みたいなものは漠然と持っているだろうけれども、それを意識しながら、今あなたが言ったような、作品の研究をそれを活用してやっていくというのはどうも見かけられなかつたな。

**小田切** 日本語ないし日本文学をやっている学生たちが文芸学をやっているというようすは……？

**近藤** それは一カ月間モスクワで見たところ、聞いたところではなかったですね。

**西尾** やっぱりどうもむこうの人は、あらかじめ触れた一、二の人でいうと、結局日本文学研究をめざして、まずその準備的な段階に日本語の研究をやっている。その日本語の研究の仕方が言語学的であるよりも、ちゃんと文学をめざしたことをどうも

目途としてゐるらしい。ところがぼくはむこうの文学の研究の健全なところじゃないかとおもふ。日本でいえば、日本の文芸学も、ちゃんと文学をもう少しめざして、今出た言葉でいえばたしかな評論というものをめざし、その基礎としての文芸学という位置づけでやっていたらよかったと思うのだけれども、それが文芸学で終りだと思ってやったから変だったのじゃないか。だからまだ少し工合が悪いところが残っているのじゃないかと思うんです。

**小田切** ソビエトでは社会主義リアリズム論を新しく討議しようということが言われているが、もっと社会主義リアリズム論が発展すれば理論的な研究自体が発展する。それは当然文学に対する科学の発展にもならざるを得ないので、文芸学自体が発展すると思いますが、リアリズム論自体が今まで発展が遅れていたということは、ソビエトをはじめヨーロッパ全体に言えると思います。まあ、これからのことでしょうね。

**近藤** そうですね。これからのことですね。その意味で社会主義リアリズム論が国際大会のテーマになるので、小田切君なん

かがいけば非常によかったと思いますが、しかしそれは時間の問題ですね。

**小田切** ぼくは去年の暮に行くことになっていたのですが、いつのまにか流れちゃって……。

**西尾** それを文芸学と呼べば、それと日本文学研究とどう結びついているのか、あるいは結びついていないのかということとはわれわれとしては知りたいことですね。

**近藤** それを結びつけるためにも、小田切君が言った社会主義リアリズムをもう一段進めなければならぬ段階じゃないですかね。その問題が真正面から取り上げられるようになれば、ソビエトにおける日本文学研究というのは別の意味で大きく前進するのじゃないですかね。それは私の感じではない、少くとも意識的には結びつけていないという感じがですね。

**小田切** この前モスクワ大学の日本語科の助教授で日本へきた人……イワネンコさん。あの人と話しているときに、作品の芸術性の問題、それから歴史性の問題という問題について十分には話ができなかったけれども、ソビエト文学の中で文芸学がそういう問題をどの程度規定して、それにイワ

ネンコさんのやっている作家の研究がどういうふうに生かされているか知りたいと思いつながら、糸口で終わってしまったのですが、その点どうですか。

**近藤** 例の一昔も二昔も前の芸術作品の価値評価の基準の問題はあのままになっているようですね。しかしそれは仕方がないのじゃないですか。研究の発展というのはそういうものではないでしょうか。理論的な整理をするというだけでは発展しないので、それが作品のつかみ方をゆたかにすると、そこから又あらたに理論的な問題が生れて来るという、自然の歩みかもしれないですね。なんか事情があつて停滞しているとは考えられませんね。

**小田切** イワネンコさんのこの前の話では日本の作家について日本にいるわれわれにはちょっと気のつかないようななかなかおもしろい観察をやっておられると思ったのですが、むこうの研究所なんかでは、特に作品の位置づけなんか日本人と非常に違った位置づけをやっておもしろかったというような例はありませんか。

**近藤** 方法としてわれわれとだいぶ違うからおもしろかったということはなかった

ですね。

**小田切** 戦争前に、ソヴェト版の日本文学史という形で、まとまっているかどうかはわからなかったのですが、とにかく万葉や竹取や源氏や平家なんかについてのソビエトの学者の研究が、当時日本で出ていた「月刊ロシア」というなかば陸軍なんかの御用雑誌みたいな面を持ちながら同時にソビエトの文化的な動きもなかなかよく紹介しているという複雑な雑誌があって、それに連載されたことがありましたが、あれはコンラードさんあるいはベルマンさんたちがやったのじゃないかと思うんですが、それなんかだと日本文学をわれわれが見ているのと全然違う角度で見ていて、……そうそう、そのあとで唯物史観日本文学史という翻訳があとでまとまった形で出たと思いますが……読んでいて平家物語を中世の騎士物語に比べて考えると、今でいえば常識的みたいなことになりませんが、戦争前まで日本文学の研究は非常に独創的でおもしろいものがたくさんあったのです。今度行かれて、むこうの人の話で、そういうおもしろさがありましたか。

**近藤** 日本でもそういう状態が出て来て

いると思うんだけど、学問のやり方は少し緻密になっていくわけです。個々の作品や作家に深く入って、たいへん緻密になっているということは感じましたね。これはいいか悪いかは別として、そして又、

いい場合も悪い場合もあるわけですが、今日本でもそうじゃないですかね。だからコンラードさんには最後にモスクワを立つ時お目にかかったけれども、来年七十才ですが、「私の晩年の仕事は源氏物語研究を完成することです」と、たいへん情熱をこめて言っておられたのですが、そのためにも今準備の仕事をしているのだけれども、弘法大師の詩論なんかについて少し読みたいのだという話なので、文鏡秘府論のよいテキストが出てくるからそれをお送りしようという約束してきたんです。

**小田切** 七十のお祝いを日本でやるといいですね。昇さんが亡くなったときにモスクワでソヴェトの文学者文学研究者が追悼の集まりをやったそうです。

**近藤** それは非常にいい案だな。コンラードさんはソ連での日本研究の第一人者だし、日本でのわれわれの研究に対し



モスクワでの送別会、中央近藤教授、その右モスクワ大学東洋文学語学講座長バユーソフ教授、イワネンコ教授、左は片山やす子さん、（潜氏息女）近藤教授の左上作家同盟のリウオーワ女史、中央最上段はアカデミー東洋研究所員コンスタンチノフ氏

でも大きな示唆を与えてくれているわけだから、七十の賀を日本でもやるというのはいへんいいことだと思えますね。

**小田切** まだまだおもしろい話があるとおもいますけれど、ちょうど時間もきたのでこの辺で速記をとめましょう。どうもありがとうございました。

一九五九年六月二十四日

於法政大学小田切研究室

速記……………佐久間邦夫

**追記** 屋食時という限られた時間内での座談だったので、校正刷りを読んでみると甚だ不十分にしかしゃべっていないし、重要なことも正確に説明することができていない。これはやはり他の機会に改めて書かせてもらうことにするよりほかに手がない。

ただこんどの旅行中、いろいろお世話になったつぎのかたがた モスクワ大学総長ベトロフスキーさん、副総長の一人イワノフさん、外国部長のニキフォロフさん、講座長のパユソフさん、それにイワネンコさん、片山やす子さん、小野理子さん、通訳のコルシコフさん、留学生の米

川哲夫さん。作家同盟のチユグノフさん、リヴォーワさん。ソ日協会のチエホーニンさん、翻訳家のマルコワさん。アカデミー附属研究所員のコンスタンチノフさん、ヴァルドリさん、マロシキーナさん。レニングラード大学では、ペトロワさん、岸田さん、ピヌスさん、バビンツェフさん。ソ日協会支部のニーナさん。プラハではチャールス大学のヒルスカーさん、文化省のカルミノワさん、東洋研究所のズデンカさん、ネウストプニさん、世界労連書記局の井出さん夫妻、留学生の千野栄一さん、日文科学生のアレナさん、イェリネクさん、ミリアムさん、ヤナさん。大学院のイヴォさん。そのほかタガンローグ号の船長ペフテレフさんはじめ船員のかたがた。ウラヂャストーク大学のコストロミーさん。これらのかたがたに対する心からのお礼のことばを、この機会に書き記させていただくことにしたい。

(近藤忠義)

なお、この鼎談のカットとして掲載した写真は、最後のモスクワでの送別会のものをのぞくほかはすべて近藤教授の作品であることをおこわります。

## 日本文学誌要

### バックナンバー

《第一号》 一九五七年一二月発行

復刊のことば

日本近代劇成立の背景……………田中 喜一

伊勢物語覚え書……………滝瀬 爵克

日本における朝鮮文学の歴史的意義とその諸問題……………朴 春日

とりとめのない回想……………小原 元

「解放」目次……………本間 洋子

——大正8年6月——同10年3月——

《第二号》 一九五九年三月発行

片岡良一教授追悼

日本近代文学史研究の基礎確立者——

片岡良一の仕事について……………小田切秀雄

片岡先生における西鶴……………猪野 謙二

片岡良一教授年譜……………片岡 懋

桐壺の院……………益田 勝実

「保元・平治物語」……………中村 慎  
における課題

「解放」目次……………本間 洋子

——大正10年4月——同12年9月——

頒価一・二号とも八〇円。御送金は振替を利用して下さい。

東京六四九三番 法政大学国文学会